

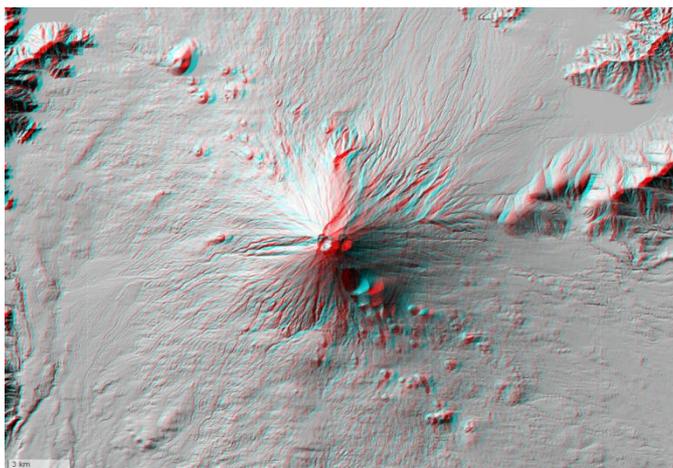
「アナグリフによる地形の観察(5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

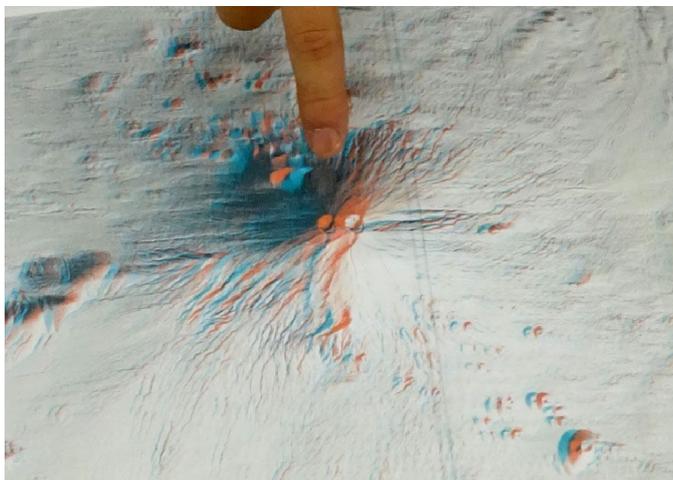
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

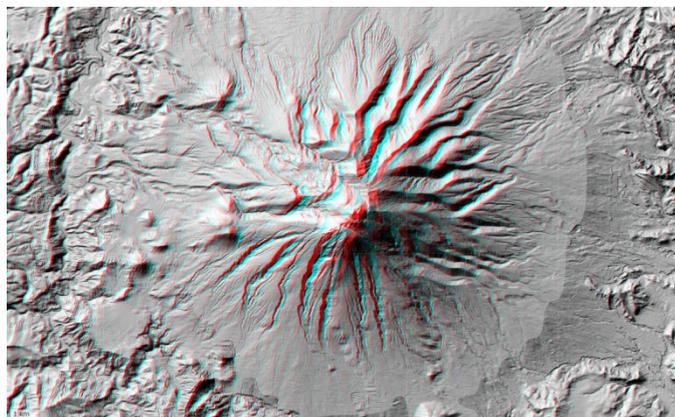
アナグリフの立体視で、子どもたちに観察させたい画像は日本中にたくさんある。特に効果的なのは、火山の地形だと思う。国土地理院の地形図閲覧ページで、任意の地域、任意の縮尺率でアナグリフ画像を作成・保存できる。 ※2ページ目以降に拡大画像あり。



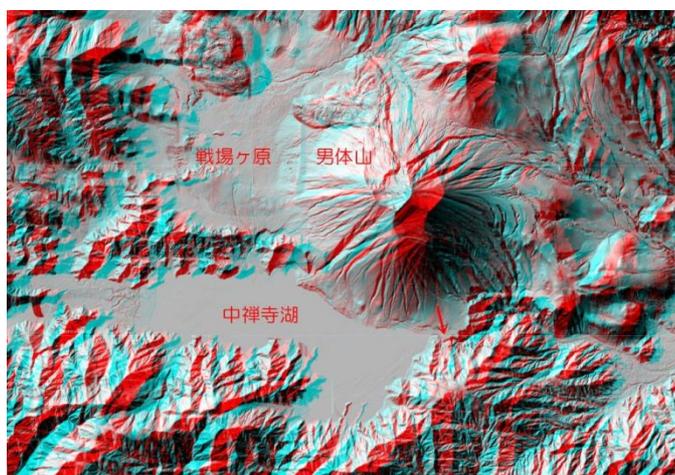
これは富士山のアナグリフ画像だ。富士山は日本の火山の中でも最も新しい火山に属し、最後に噴火したのは江戸時代の宝永4年(1707年)である。山頂から放射状に浸食谷は見られるが、まだ浅いものが多い。(大沢と吉田大沢を除く)浸食谷はまだ1本も火口とは繋がっておらず、火口壁は全周維持されている。南南東～北北西にかけて数多く存在する小さなコブ(隆起)は、すべて寄生火山(側火口)である。



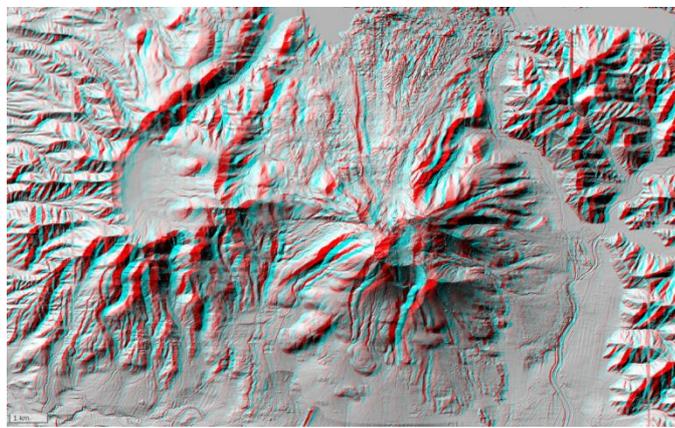
富士山のアナグリフ画像を見ると、山麓よりも山頂付近のほうが「赤と青のズレ」が大きい。ズレが大きいほど出っばって見える。



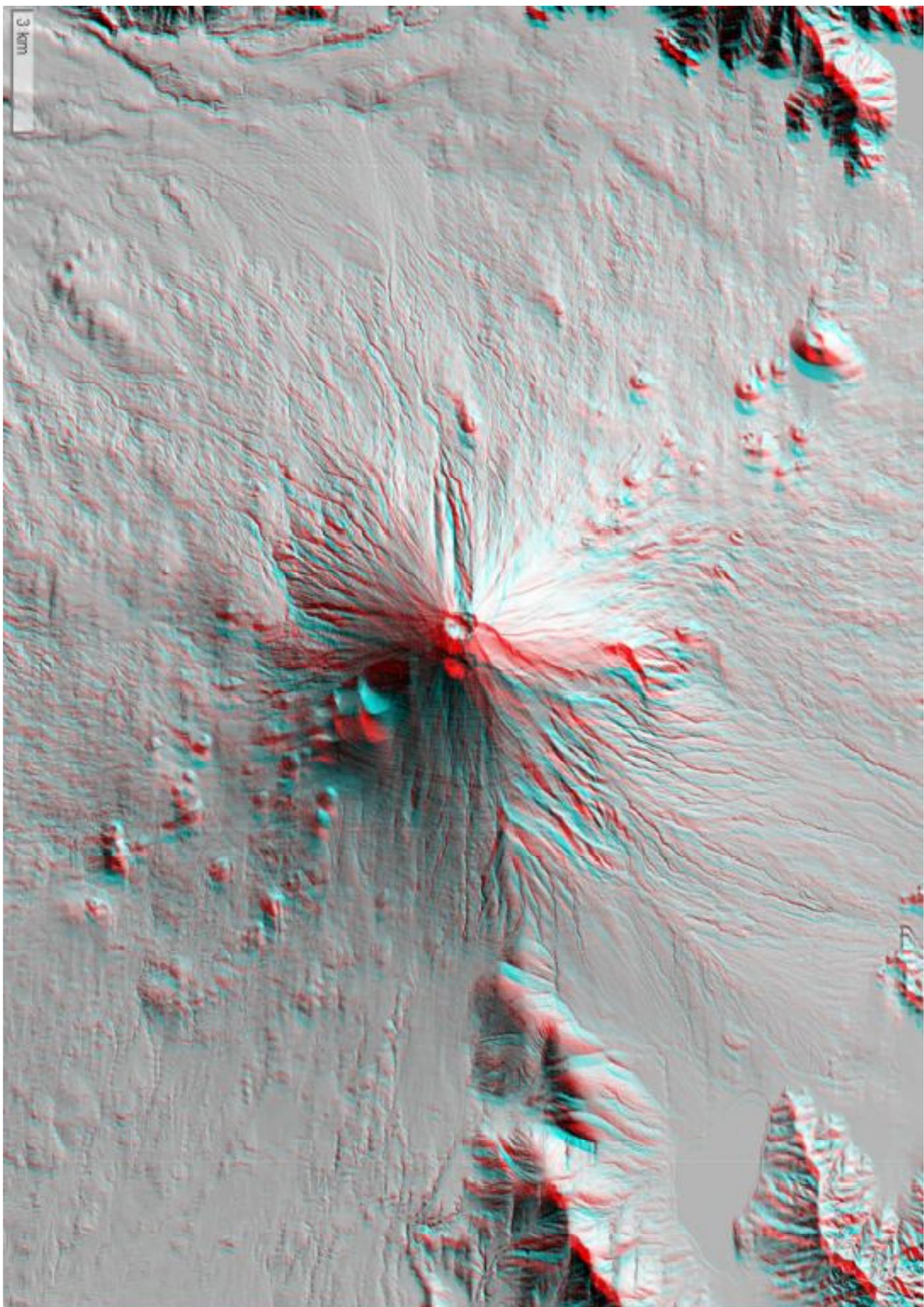
同じ成層火山でも「岩木山」(青森県)は、浸食の様子がずいぶん異なる。放射状の浸食谷が目立つ。約2000年前を境に、溶岩流を伴う噴火をしていないからであろう。

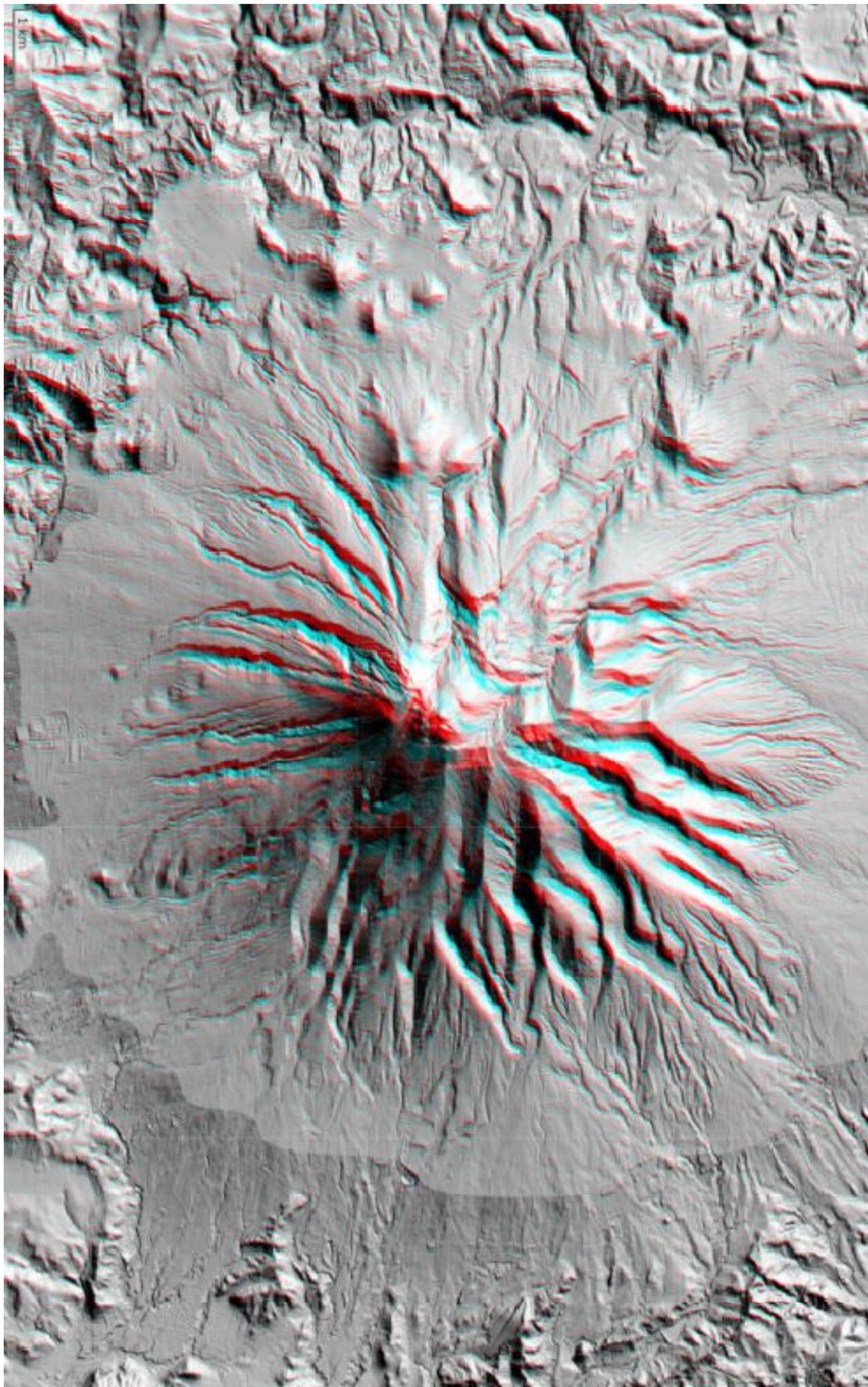


男体山とその周辺も面白い。男体山が最後に噴火したのは、従来約14000年前とされていたが、最近の研究で約7000年前と判明している。富士山よりもずっと古いので、北側の浸食谷は火口壁を破り、「火口瀬」を形成していることが読み取れる。男体山の火山活動で堰き止められた中禅寺湖と、↓の位置に華厳の滝を境にした、日光方面(東)の落差も顕著だ。



磐梯山の画像は更に興味深い。明治21年(1881年)の大噴火の山体崩壊のあとが、山頂から北側に顕著に見てとれる。





戰場ノ原

男体山

中禅寺湖

